

大学生のひきこもり親和性とレジリエンスの関連

佐野 春菜 神戸学院大学心理学研究科 村井 佳比子 神戸学院大学心理学部

Correlation between affinity for withdrawal and resilience in college students

Haruna Sano (*Graduate School of Psychology, Kobe Gakuin University*)

Keiko Murai (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

本研究の目的は、ひきこもり親和性とレジリエンスとの関連を調べ、レジリエンスのどの要素とひきこもり親和性が関連するのかを検討することで、ひきこもりを予防するために何が必要かを見出すことであった。大学生 343 名を対象に調査を行い、大学生用ひきこもり親和性尺度と二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の各因子の関係を検討した。重回帰分析の結果、資質的レジリエンス要因の高さが、「ひきこもることへの願望」の低さと関連すること、また、資質的レジリエンス要因「統御力」「社交性」の高さが、「ひきこもる人への共感」の低さと関連し、獲得的レジリエンス要因「他者心理の理解」の高さが、「ひきこもる人への共感」の高さと関連することが示された。「ひきこもることへの願望」は資質的レジリエンスと関連が深く、ひきこもり状態に移行するきっかけを作る可能性があることに對し、「ひきこもる人への共感」は、より良い人間理解につながる能力であることが示唆された。

Key words: affinity for withdrawal, resilience, innate, acquired, college students.

キーワード：ひきこもり親和性、レジリエンス、生得的、獲得的、大学生

Kobe Gakuin University Journal of Psychology

2022, Vol.5, No.1, pp.31-37

問題と目的

近年、「ひきこもり」は大きな社会問題となっている。ひきこもりとは、「様々な要因の結果として社会的参加（義務教育を含む就学、非常勤等を含む就労、家庭外での交遊など）を回避し、原則的には6カ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしてもよい）を指す現象概念」と定義される（内閣府、2016）。15～39歳のひきこもりの推定数は、2015年度に実施された調査の報告によると、約54.1万人と報告されている（内閣府、2016）。さらに、内閣府（2016）によると、ひきこもりに対して肯定的な態度を示す「ひきこもり親和群」は約165万人と推計されており、この数字は、内閣府が2009年度に行ったひきこもりの実態調査実施時よりも増加している。そのため、ひきこもりには至らないまでも、ひきこもりに親和的な態度を示す若者は無視できない存在である（牧・海田・湯澤、2010）。

ひきこもりに親和的な態度を示す若者とはすなわち、「ひきこもり親和性が高い人々」であり、ひきこもり親和群のことを指す。ひきこもり親和群とは、「実際にはひきこもっていないにもかかわらず、ひきこもる人の気持ちがわかるとか、自分でもひきこもりたいと思う人々」のことであり（内閣府、2010）、ひきこもり親和性はひきこもりに対する肯定的な態度を表す用語である。

渡部・松井・高塚（2010）によると、ひきこもり状態にある者は他者に対して恐れや不安を感じ、家族や物への暴力が見られるが、これに対してひきこもり親和群は、主にうつ症状を抱えており、自分の考え方に対するこだわりのために、他者から口出しをされることを嫌うという特徴があるという。新井・弘中・近藤（2015）は、大学生246名を対象に、質問紙調査を実施し、ひきこもり親和性の高い人々は、社会的な場面そのものは回避することなく、社会参加を継続しているが、自己主張を控えることで対人葛藤を避ける傾向にあることを指摘している。

つまり、ひきこもり親和性の高い人々は、他者に対して恐れや不安を感じているわけではなく、自分の意見にこだわりがあり、他者から評価や批評をされることを恐れる傾向にあるために、社会場面そのものは回避せず参加を継続しているものの、葛藤を抱えてうつ状態に陥っている可能性があるということである。ひきこもり親和性がひきこもりに転じることを予防するには、対人関係のスキルの強化が有効であるとされており（東京都青少年・治安対策本部, 2008）、対人場面において他者からの評価や批判を回避できなくなる事態が生じて、困難と感じる問題や危機的な状況に適応する力を身につけることができれば、ひきこもり状態への移行を予防できるのではないと思われる。

危機状態に適応する力としては、レジリエンス (resilience) が挙げられる。レジリエンスとは、もともとは環境的なリスクが高いにもかかわらず適応する人々を対象にした研究から発展した概念であり、「リスクや逆境にもかかわらず、よい社会適応をすること」という意味がある（庄司, 2009）。平野（2010）は、レジリエンスを2つの要因、個人がもともと持っている資質的な性質の強い要因と、後天的に獲得する性質の強い要因に分けて捉えることができている。資質的なものとしては「楽観性」や「統御力」「社交性」「行動力」があり、獲得できるものとしては「問題解決志向」や「自己理解」「他者理解」がある。これらの力があるほど、精神的につらく、困難を感じる状況に直面したとしても、状況に適応することができるということである。つまり、ひきこもり状態への移行を予防するには、「楽観性」などの資質を活かすか、もしくは、「問題解決志向」といった力を獲得することであるといえる。佐野（2020）は、ひきこもり青年の社会参加に向けたプロセスについて、支援者との関係構築（第1段階）、挫折経験からの立ち直り（第2段階）、社会活動への参加と成功体験の蓄積（第3段階）、安定した社会参加（第4段階）の4つの段階を提起しており、社会活動の参加を継続しているひきこもり親和群においては、第3段階における関わりが必要ではないかと考えられる。新井他（2015）は、ソーシャルスキルトレーニングや対人スキルを身につけるためのグループ活動が対人的自己効力感を高め、ひきこもり親和性を低下させる可能性を示唆している。一方、大学生の自己主張に関する調査では、ひきこもり傾向が高くても得意な場面では適切な自己主張ができることが示されており（会田・宮崎, 2018）、もともと備えている強みを活かしながら成功体験を増やし、問題解決力をつけることでひきこもり状態への移行を予防できるのではないかと考えられる。

そこで本研究では、ひきこもり親和性とレジリエンスとの関連性を明らかにし、レジリエンスの各要素とひきこもり親和性がどのような関連を示すのか

を検討することで、ひきこもり予防に関する新たな知見を見出すことを目的とする。ひきこもり親和性の特徴として交友関係の苦手さがあること、また、問題に対する回避傾向が示唆されていることから（渡部他, 2010）、レジリエンスにおける資質的な性質の強い「社交性」および、後天的に獲得する性質の強い「問題解決志向」の高さが、ひきこもり親和性の低さと関連することが予測される。

方法

調査対象者

兵庫県の私立大学に在籍する大学生 343 名（男子 153 名、女子 185 名、不明 5 名、平均年齢 19.05 歳、標準偏差 1.22）を対象とした。

調査時期

2021 年 12 月から 2022 年 4 月に調査を実施した。

調査方法

心理学系の授業開始前に調査用紙を一斉配布し、質問紙調査を実施した。所要時間は約 15 分であった。

調査内容

本調査の質問紙は、フェイスシート、ひきこもり親和性尺度、二次元レジリエンス尺度で構成されていた。

フェイスシート 調査対象者の性別、年齢、学年について回答を求めた。

大学生用ひきこもり親和性尺度 ひきこもり親和性を評価する尺度として、大学生用ひきこもり親和性尺度（下野・長谷川・土原・国里, 2020）を用いた。本尺度は、自分もひきこもりたいたいといった気持ちが反映された「ひきこもることへの願望」と、ひきこもる人の気持ちが分かるという内容が反映された「ひきこもる人への共感」の2因子から成る、16項目の尺度であった。それぞれの項目について、「はい」「どちらかといえばはい」「どちらかといえばいいえ」「いいえ」の4件法で回答を求めた。得点はそれぞれ順に4点、3点、2点、1点の配点とした。得点が高いほど、ひきこもりに対して肯定的であり、親和的であることを示す。

二次元レジリエンス要因尺度 (Bidimensional Resilience Scale: BRS) レジリエンスの資質的・獲得的要因を測定する尺度として、平野（2010）の二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) を用いた。本尺度は、持って生まれた気質と関連の強い「資質的レジリエンス要因」と、発達の中で身につけやすい「獲得的レジリエンス要因」の2つに分かれており、それぞれ「楽観性」「統御力」「社交性」「行動力」の4因子、「問題解決志向」「自己理解」「他者心理的理解」の3因子から成る、計7因子構造21項目の尺

度であった。それぞれの項目について、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。得点はそれぞれ順に5点、4点、3点、2点、1点の配点とした。得点が高いほど、レジリエンスの各要素を高い水準で備えていることを示す。なお、平野（2010）においては、「はい」～「いいえ」の5件法で回答を求めているが、本研究では予備調査を行い、「はい」～「いいえ」が回答しにくいとする意見を受けて、上述の「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法を採用した。

倫理的配慮

調査実施時には、研究の目的と内容、さらに、なんら不利益を被ることなくいつでも調査への協力を辞退できること、個人情報を守られることを書面と口頭で説明し、同意書に署名を得たうえで実施した。なお、本研究は神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号 HP21-21）。

結果

各尺度の信頼性の検討

表1に大学生用ひきこもり親和性尺度とBRSの各

下位尺度の平均値と標準偏差を示す。それぞれの内的整合性を検討するためにクロンバックの α 係数を算出した。大学生用ひきこもり親和性尺度の下位尺度は $\alpha = .87$ と $\alpha = .84$ であり、一定の信頼性があることが確認された。BRSについては、資質的レジリエンス要因の「統御力」因子、獲得的レジリエンス要因の「自己理解」因子が、それぞれ $\alpha = .63$ 、 $\alpha = .50$ とやや低い値となり、これ以外は $\alpha = .71 \sim .86$ であった。平野（2010）において、「統御力」「自己理解」の信頼性はやや低くなるが、それぞれの下位尺度を構成するために必要な項目であると述べられていることから、本研究では7因子構造で分析することとした。

各変数間の相関

大学生用ひきこもり親和性尺度とBRSそれぞれの下位尺度間の関係を検討するため、ピアソンの積率相関係数を算出した（表2参照）。その結果、大学生用ひきこもり親和性尺度の下位尺度である「ひきこもることへの願望」因子と、二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の下位尺度である資質的レジリエンス要因より、「楽観性」「統御力」「社交性」「行動力」との間に有意な負の相関が見られた（順に、 $r = -.395$, $p < .01$; $r = -.429$, $p < .01$; $r = -.386$, $p < .01$; $r = -.316$, $p < .01$ ）。また、獲得的レジリエンス要因より、「問題解決志向」「自己理解」「他者心理の理解」との間にも

表1 大学生用ひきこもり親和性尺度・二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の平均値と標準偏差の結果

	下位尺度	平均	標準偏差
ひきこもり親和性	ひきこもることへの願望($\alpha = .87$)	25.5	6.85
	ひきこもる人への共感($\alpha = .84$)	20.2	3.32
二次元レジリエンス要因	資質的レジリエンス要因		
	楽観性($\alpha = .82$)	11.5	2.51
	統御力($\alpha = .63$)	9.6	2.77
	社交性($\alpha = .86$)	8.8	3.27
	行動力($\alpha = .77$)	9.9	2.83
	後天的レジリエンス要因		
	問題解決志向($\alpha = .76$)	11.0	2.66
	自己理解($\alpha = .50$)	10.7	2.23
	他者心理の理解($\alpha = .71$)	11.7	2.34

注)下位尺度名に続くカッコ内は α 係数を表している。

表2 各尺度の相関結果

	ひきこもり親和性		二次元レジリエンス要因							
	ひきこもることへの願望	ひきこもる人への共感	資質的レジリエンス要因				後天的レジリエンス要因			
			楽観性	統御力	社交性	行動力	問題解決志向	自己理解	他者心理の理解	
ひきこもり親和性										
	ひきこもることへの願望	.281**	-.395**	-.429**	-.386**	-.316**	-.135*	-.147**	-.154**	
	ひきこもる人への共感	-	.001	-.124*	-.110*	.025	.029	.022	.085	
二次元レジリエンス要因	資質的レジリエンス要因									
	楽観性		-	.428**	.379**	.323**	.262**	.265**	.355**	
	統御力			-	.413**	.429**	.199**	.169**	.329**	
	社交性				-	.251**	.402**	.139**	.308**	
	行動力					-	.297**	.139**	.263**	
	後天的レジリエンス要因									
	問題解決志向						-	.167**	.296**	
	自己理解							-	.299**	
	他者心理の理解								-	

** $p < .01$, * $p < .05$

有意な負の相関が見られた($r = -.135, p < .05$; $r = -.147, p < .01$; $r = -.154, p < .01$)。大学生用ひきこもり親和性尺度の下位尺度である「ひきこもる人への共感」因子と、二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の下位尺度である資質的レジリエンス要因より、「統御力」「社交性」との間に有意な負の相関が見られた(順に、 $r = -.124, p < .05$; $r = -.110, p < .05$)。

レジリエンスがひきこもり親和性に与える影響

BRSの各下位尺度得点が、大学生用ひきこもり親和性尺度の下位尺度得点に与える影響を検討するため、大学生用ひきこもり親和性尺度を従属変数、BRSの各下位尺度を独立変数として、重回帰分析(強制投入法)を行った(表3・4参照)。大学生用ひきこもり親和性尺度の「ひきこもることへの願望」を従属変数とした場合の重決定係数(R^2)は0.29(1%水準)、「ひきこもる人への共感」を従属変数とした場合の重決定係数(R^2)は0.05(5%水準)でそれぞれ有意であった。

「ひきこもることへの願望」については、資質的レジリエンス要因「楽観性」「統御力」「社交性」「行動力」との関連が認められ(順に、 $\beta = -.209, p < .01$; $\beta = -.223, p < .01$; $\beta = -.234, p < .01$; $\beta = -.136, p < .01$)、資質的レジリエンスの高さが、「ひきこもることへの願望」の低さと関連することが示された。

「ひきこもる人への共感」については、資質的レジリエンス要因「統御力」「社交性」(順に、 $\beta = -.171, p < .01$; $\beta = -.132, p < .05$)、および、獲得的レジリエンス要因「他者心理の理解」($\beta = .135, p < .05$)との

関連が認められ、「統御力」「社交性」の高さが、「ひきこもる人への共感」の低さと、「他者心理の理解」の高さが、ひきこもる人への共感の高さと関連することが示された。

多重共線性については全ての項目でVIF値が2以下(1.14~1.52)であったため、多重共線性は生じていないと判断した。

考 察

本研究の目的は、ひきこもり親和性とレジリエンスとの関連を調べ、レジリエンスのどの要素とひきこもり親和性が関連するのかを検討することで、ひきこもりを予防するために何が必要かを見出すことであった。重回帰分析の結果、資質的レジリエンス要因の高さが、「ひきこもることへの願望」の低さと関連すること、また、資質的レジリエンス要因「統御力」「社交性」の高さが、「ひきこもる人への共感」の低さと関連し、獲得的レジリエンス要因「他者心理の理解」の高さが、「ひきこもる人への共感」の高さと関連することが示された。以上のことから、資質的レジリエンスである「社交性」の高さはひきこもり親和性の低さと関連していたが、獲得的レジリエンスである「問題解決志向」とひきこもり親和性には関連が認められないことが示された。

「ひきこもることへの願望」と資質的・獲得的レジリエンス要因との関連

重回帰分析の結果より、資質的レジリエンス要因

表3 ひきこもることへの願望を従属変数とした重回帰分析結果

			B	β
二次元レジリエンス要因尺度(BRS)	資質的レジリエンス要因	楽観性	-0.568	-0.209**
		統御力	-0.552	-0.223**
		社交性	-0.490	-0.234**
		行動力	-0.328	-0.136**
	後天的レジリエンス要因	問題解決志向	0.204	0.079
		自己理解	-0.132	-0.043
		他者心理の理解	0.265	0.091
		R^2		0.294**

注)** $p < .01$, * $p < .05$

表4 ひきこもる人への共感を従属変数とした重回帰分析結果

			B	β
二次元レジリエンス要因尺度(BRS)	資質的レジリエンス要因	楽観性	0.056	0.043
		統御力	-0.205	-0.171**
		社交性	-0.134	-0.132*
		行動力	0.080	0.069
	後天的レジリエンス要因	問題解決志向	0.055	0.044
		自己理解	0.000	0.000
		他者心理の理解	0.192	0.135*
		R^2		0.05*

注)** $p < .01$, * $p < .05$

が高いほど、ひきこもりたいという気持ち、つまり、「ひきこもることへの願望」を抱きにくいことが示された。資質的レジリエンス要因は、「楽観性」「統御力」「社交性」「行動力」から構成されており、これらが高いということは、新しいことに積極的にかわり、ストレスをもたらず状況下であっても、気持ちを切り替え、周囲のサポートを得ながら対処できる資質を持っていることを示す。このような資質がある場合、「人に会いたくない」「一人でいたい」といった、ひきこもりにつながる態度が生じにくく、「ひきこもることへの願望」が生まれにくいといえる。一方、後天的に身につけやすい獲得的レジリエンス要因と「ひきこもることへの願望」には関連がなかった。生得的な気質と関連の強い資質的レジリエンス要因については、双生児法によって遺伝的影響が強いことが示されている（平野，2011）。「ひきこもることへの願望」が獲得的レジリエンス要因ではなく、資質的レジリエンス要因に関連するということは、「ひきこもることへの願望」が遺伝的資質からの影響を受けやすい可能性があることを示唆している。資質的レジリエンス要因は、心理的な敏感さと強い負の関連性にあるとされている（平野，2012）。ひきこもり親和性が高い者は、他者からの評価に対して敏感で、対人関係に不安を抱えているとされており（新井他，2015）、これらのことから、もともと環境変化に敏感で、動揺しやすい繊細な特性を持って生まれたことが、「ひきこもることへの願望」につながっているのではないかと考えられる。そうであるならば、「ひきこもることへの願望」は個性であり、改善すべきものというよりは、この個性を活かしながら、ひきこもりを予防する方法を検討する必要がある。例えば平野（2015）は、心理的な敏感さによるリスクを獲得的レジリエンス要因によって緩和することができるかどうか検討しており、その結果、緩和効果は見出せなかったが、敏感さという資質を活かした対処（コーピング）を考えることはできると述べている。資質的レジリエンス要因が低い場合、問題への対処方法として「その場に留まる」といった消極的な対処や、「話を聴いてもらう」といったサポートを好むことが示唆されている（平野，2015）。平野（2015）は、「その場に留まる」という消極的コーピングを「逃げない我慢強さ」「あきらめ、受け入れる」という、底力のある強みの“忍耐”として捉え、そのような消極的とされるコーピングを用いながら、「聴いてもらう」という情緒的なサポートを、「教えてもらう」という具体的なサポートに変えていけるようにすることによって、レジリエンスを高めていける可能性を提起している。つまり、「ひきこもることへの願望」をひきこもり状態に移行しないようにするには、自分自身の特性を理解するとともに、自ら他者に働きかける行動を少しずつ身につけることではないかと思われる。新井他（2015）は、対人スキルを身につける

ためのグループ活動がひきこもり親和性を低下させる可能性を示唆しており、「ひきこもることへの願望」を強く持つ人に対する支援を行う上では、安心できる場を提供し、共感的に話を聴くとともに、問題解決につながる具体的な提案を伝えることが有効ではないかと考えられる。

「ひきこもる人への共感」と資質的・獲得的レジリエンス要因との関連

重回帰分析の結果より、資質的レジリエンス要因のうち、「統御力」「社交性」の高さがひきこもる人への共感の低さを、獲得的レジリエンス要因である「他者心理の理解」の高さが「ひきこもる人への共感」の高さと関連することが示唆された。「統御力」が高いということは、不安が少なく、ネガティブな感情や生理的な体調に振り回されずにコントロールできる力を高い水準で有しているということであり、ひきこもり状態にある対象が持つネガティブな側面に引きつけられず、自身のパフォーマンスを低下させることなく日常生活を遂行できるという、ある種の頑健性を有しているといえる。そのため、ひきこもり状態にある対象に対し共感的な感情を抱きにくいと考えられる。「社交性」との関連については、ひきこもり親和性が高い者が、抑うつや罪悪感、自己決定に対する他者からの干渉を避ける傾向にあるとともに、友人との内面的な関係を避け、表面的に円滑な関係を保とうとする傾向や、自身の意見や考え、悩み事を友人に話さない自己閉鎖的な傾向が強いため（牧・海田・湯澤，2010）、「社交性」が高い者、つまり、もともと見知らぬ他者に対する不安や恐怖が少なく、他者との関わりを好み、コミュニケーションを取れる力を高い水準で有している者は、その対極にある存在と言っても過言ではない。他者との関わりに対して恐怖心が薄く、むしろコミュニケーションをとることを好ましいと感じている場合は、ひきこもる人の気持ちに共感的にはならないということはあるといえる。

一方、獲得的レジリエンス要因である「他者心理の理解」については、他者の心理を認知的に理解、もしくは受容する力を高い水準で有する者ほど、ひきこもり当事者に対して共感的な感情を抱きやすいという結果であった。獲得的レジリエンス要因である「問題解決志向」「自己理解」「他者心理の理解」という構成因子は、自分の気持ちや考えを把握することによって、ストレス状況をどう改善したいのかという意志を持ち、自分と他者の双方の心理への理解を深めながら、その理解を解決につなげ、立ち直っていく力と関係しているとされている（平野，2015）。つまり、ひきこもりに対して共感的な気持ちを抱く人は、ひきこもりに対して自己と他者を混合し、同一視しているというよりは、その感情や状況を否定せずに理解する力があるといえる。表2の各

尺度の相関結果より、「ひきこもることへの願望」と「他者心理の理解」の分析結果を見ると、「ひきこもることへの願望」が高いほど「他者心理の理解」が低いことが示されており、「ひきこもることへの願望」と「ひきこもる人への共感」は独立した指標であると考えるのが適切ではないかと思われる。以上のことから、「ひきこもることへの願望」は資質的レジリエンスと関連が深く、ひきこもり状態に移行するきっかけを作る可能性があることに對し、「ひきこもる人への共感」は、より良い人間理解につながる能力であることが示唆された。「ひきこもることへの願望」が高い人のレジリエンスを高めるには、資質的な繊細さを活かして粘り強く他者と関わり続けることのできる環境を整えたとともに、そのプロセスを通して自他の理解をすすめることが有効ではないかと考えられる。

佐野 (2020) は、ひきこもり青年は自分への脅威から自分の身を守るための術として自らを社会と離断していると述べており、ひきこもり青年の社会参加に向けたプロセスについて4つの段階を提起している。このうち第2段階は「挫折経験からの立ち直り」段階となっており、社会活動の参加を継続できているひきこもり親和群においては、第3段階である「社会活動への参加と成功体験の蓄積」が必要ではないかと考えられる。ひきこもりに対して親和的な感情を抱く人のコミュニケーションの特徴として、自分の意見にこだわりがあり、他者から評価や批評をされることを良く思わないこと (渡部他, 2010)、自己主張を控える傾向にあることが指摘されているが (新井・弘中・近藤, 2015)、その一方で、大学生の自己主張に関する調査では、ひきこもり傾向の高低にかかわらず得意・不得意な場面があり、ひきこもり傾向が高くても困難な場面で適切な自己主張ができることが示されている (会田・宮崎, 2018)。ひきこもり傾向の有無だけでなく、多様な個人差について相互理解を深めることのできる場を提供し、お互いに主張は違ってもそこに一緒にいることができるという経験を作ることが、獲得的レジリエンスを高め、結果としてひきこもり予防につながるのではないかとと思われる。

本研究の限界と今後の課題

本研究において、「ひきこもることへの願望」は遺伝的資質からの影響を受けやすく、ひきこもり状態に移行するきっかけを作る可能性があること、また、「ひきこもる人への共感」はより良い人間理解につながる能力であり、ひきこもり予防に貢献できる可能性があることが示唆された。このことから、資質的な繊細さは個性として活かしつつ、他者と関わり続けることのできる環境を整えることで、「他者心理の理解」をはじめとする獲得的レジリエンスが高まり、結果としてひきこもり予防につながる可能性が示さ

れた。

本研究の限界として、ひきこもり親和性とひきこもり経験者の関係が明確ではないこと、ひきこもり状態を回避、あるいは脱する具体的なきっかけについては検討できていないことが挙げられる。これらの課題を検討していくために、過去にひきこもり状態を経験したことがあるひきこもり経験者と、ひきこもり状態を経験したことがないひきこもり未経験者のひきこもり親和性について調査する必要がある。また、ひきこもりの予防や支援について、本研究では資質を活かして他者と関わり続けることのできる環境を整えることと、自他の理解をすすめることを提起したが、ひきこもり経験者が実際に何を契機としてひきこもり状態を脱したのかを調べ、より具体的な支援のあり方を検討する必要がある。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- 会田 龍之介・宮崎 圭子 (2018). ひきこもり傾向者の対人関係—アサーティブな意思表示が可能な場面とは— 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, 14, 29-39.
- 新井 博達・弘中 由麻・近藤 清美 (2015). 社交不安症状と対人的自己効力感が大学生のひきこもり親和性に与える影響 パーソナリティ研究, 24, 1-14.
- 平野 真理 (2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成— パーソナリティ研究, 19, 94-16.
- 平野 真理 (2011). 中高生における二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の妥当性—双生児法を用いて— パーソナリティ研究, 21, 93-96.
- 平野 真理 (2012). 心理的敏感さに対するレジリエンスの緩衝効果の検討—ももとの「弱さ」を後天的に補えるか— 教育心理学研究, 60, 343-354.
- 平野 真理 (2015). レジリエンスは身につけられるか 東京大学出版会
- 牧 亮太・海田 梨香子・湯澤 正通 (2010). ひきこもり親和性の高い大学生における心理的特徴の傾向—友人関係, 不快情動回避傾向, 早期完了特徴との関連について— 広島大学心理学研究, 10, 71-80.
- 内閣府 (2010). 若者の意識に関する調査—ひきこもりに関する実態調査— 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当) Retrieved from

- <https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/pdf/gaiyo.pdf> (2022年10月25日)
- 内閣府 (2016). 若者の生活に関する調査報告書 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当) Retrieved from <https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/h27/pdf-index.html> (2022年10月25日)
- 齋藤 万比古・中島 豊爾・伊藤 順一郎・皆川 邦直・弘中 正美・近藤 直司・水田 一郎・奥村 雄介・清田 晃生・渡部 京太・原田 豊・斎藤 環・堀口 逸子 (2010). ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン 平成21年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業) 「思春期ひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究」
- 佐野 秀樹 (2020). ひきこもり傾向の青年援助 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 71, 427-432.
- 下野 有紀・長谷川 晃・土原 浩平・国里 愛彦 (2020). 大学生用ひきこもり親和性尺度の作成 感情心理学研究, 27, 51-60.
- 庄司 順一 (2009). レジリエンスについて 人間福祉学研究, 2, 35-47.
- 高比良 美詠子 (1998). 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, 14, 12-24.
- 東京都青少年・治安対策本部 (2008). 実態調査からみるひきこもる若者のこころ平成19年度若年者自立支援調査研究報告書 東京都青少年・治安対策本部総合対策部若年者課 Retrieved from <https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kids/dai03/siryou2.pdf> (2022年10月25日)
- 塚田 光太郎・幸田 るみ子 (2015). ひきこもり傾向を示す青年の心理的特徴—誇大型・過敏型の自己愛および攻撃性との関連— 桜美林論考. 心理・教育学研究, 6, 27-44.
- 渡部 麻美・松井 豊・高塚 雄介 (2010). ひきこもりおよびひきこもり親和性を規定する要因の検討 心理学研究, 81, 478-484.

—2022.8.24 受稿 2022.11.21 受理—